

「いったい」という副詞について

The Usage of the Adverb “Ittai”

山口 豊

YAMAGUCHI Yutaka

武庫川女子大学大学院 教育学研究論集

第16号 2021年

【研究ノート】

「いったい」という副詞について
The Usage of the Adverb “Ittai”

山口豊*

YAMAGUCHI Yutaka*

要旨

本稿は副詞「いったい」を取り上げ、明治・大正・昭和初期の文学作品に見られるその用法の変化を報告するものである。従来、副詞「いったい」は名詞から転じて「一つの」「ひとくりにして」「総じて」などの意を表すようになった用法と、下に「何」「どう」「どこ」「だろう」「か」などの疑問・推量表現を伴い、その思いを強めるという用法が辞書に記載されているが、実際の文学作品に用いられている「いったい」にはもう一つ「そもそも」「本当に」などと、それを受けて疑問を持って振り返りを行う用法を示したほうがよいという結論に達した。さらにこれら3つの用法の使用頻度が時代とともに変化していることを報告するものである。

1 研究の動機, 研究の目的, 研究の方法

大正末期から昭和初期にかけて活躍した作家に梶井基次郎がいる。31歳という若さで夭折した彼は「檸檬」「桜の樹の下には」などの短編が代表作である。鬱屈した若者の思いを綴った「檸檬」には次のような一節がある。

その日私は何時になくその店で買物をした。といふのはその店には珍しい檸檬が出てゐたのだ。檸檬など極くありふれている。が其の店といふのも見すばらしくはないまでもただあたりまへの八百屋に過ぎなかつたので、それまであまり見かけたことはなかつた。一體私はあの檸檬が好きだ。レモンエロウの絵具をチューブから搾り出して固めたやうなあの単純な色も、それからあの丈の詰った紡錘形の恰好も。――結局私はそれを一つだけ買ふことにした。

「一體(一体)」という語は名詞と副詞の2つの品詞を持つ語である。そのうち副詞としては、「これは一体どうしたことだ」などのように強い疑問や強調を表すのに用いられることが多い。

しかし、この「檸檬」に用いられている「一体」は決して強い疑問や強調を表しているのではない。

では、「一体」という副詞が強い疑問や強調を表すようになったのは、一体いつ頃からなのだろうか。

本稿はそのことを調査し、副詞「一体」の語義の変化を辿ることを目的とするものである。

(1)そこで、まずは現在の辞書に「一体」という副詞がどのように記載されているかを確認し、どのような用法があるのかを調査する。

(2)次に梶井基次郎の作品から「一体」という使用例を

抜き出し、彼がどのような用法で用いていたのかを調べるとともに梶井と同年代に活躍した作家の用例を探り、共時的立場による「一体」の使用傾向を把握する。

(3)最後に梶井を中心に前後の時代に活躍した作家の用例を探り、「一体」の使用傾向を把握することにより、副詞「一体」の語義の変化を辿るものである。

2 先行研究の成果と辞書の記述の確認

副詞「いったい」について単独に論じた先行研究は少ない。新藤一男の『Syntax of Ittai』⁽¹⁾は「いったい」という副詞がどのように文全体に影響を与えるのかについて書かれた論文である。稲田奈緒美の「副詞「一体」の歴史の変遷」⁽²⁾が本稿の目的に近く、話者の主観の有無が時代を経て段階的に変化していく様子が窺えると述べている。

本稿はまずは「いったい」という副詞の用法を確認するため、現在市販されている国語辞典には「一体」という語がどのように解説されているのかについて、三省堂、岩波書店、小学館、大修館書店、集英社、学研の6社の国語辞典の記述を列挙し、比較した。

三省堂 『大辞林』第四版

(名)省略

(副)①疑問を強める気持ちを表す。どうして現在のようになつたのか、相手を問いつめたり自問したりするとき用いる。

ほんとうに。「一どうする気だ」「一どこへ行ったのだろう」

②そもそも。もともと。「一自分は広義の教育家にならうと思つてゐるのだ/おめでたき人 実篤」

岩波書店 『広辞苑』第七版

* 武庫川女子大学 (Mukogawa Women's University)

〔名〕省略

〔副〕①(多く「に」を伴って)おしなべて。総じて。「一に平年並だ」 ②(疑問の意を強く表す語)本当に。「一どうした」 ③もともと。浮世風呂四「わしは一豆腐が大すきぢや」

〔接続〕(説き起こす語)そもそも。「一、その発言が不穩当だ」

小学館 『精選版 日本国語大辞典』

〔名〕省略

〔副〕ある事柄を全般的、概括的に考えていうときに用いる。そもそも。①ある結論付けをするような場合。だいたい。もともと。一般的に。*滑・浮世風呂四「わしは一体豆腐が大好きぢや」*芋粥<芥川龍之介>「一体旧記の著者などと云ふ者は、平凡な人間や話に、余り興味を持たなかったらしい」 ②特に疑問の気持を強めている場合。また相手に詰問する場合。結論的になんだか全くわからないという気持が含まれる。ぜんたい。いったいぜんたい。*雑俳・机の塵「鳥羽画の如し・いったい飯はどこへ喰ふ」

大修館書店 『明鏡国語辞典』

〔名〕省略

〔副〕①[やや古い言い方で]本源的なこととして言えば。そもそも。もともと。元来。「一釣りや猟をする連中はみんな不人情な人間ばかりだ(漱石)」「一青年の読む本ではないね(鴎外)」 ②《下に疑問の語を伴って》強い疑問や、慨嘆・非難・驚きなどの気持ちを表す。「一どうしたのだろう?」「一何が言いたいんだ」

集英社 『国語辞典』

〔名〕省略

〔副〕①そもそも。元来。「一(に)政治というものは」 ②強い疑問の気持ちを表す。「一日本はどうなるのか」

学研 『現代国語辞典』

〔名〕省略

〔副〕①もともと。元来。本来。「一彼はおもしろい奴で…」 ②強い疑問を表す語。ぜんたい「一この金を何に使うのだ」

以上のように辞書の記述を見てみると、「一体」という副詞には大きく3つの用法があることがわかる。一つは「一体」という名詞から転じて「一つの」「ひとつくりにして」「総じて」などの意を表すようになったものであり、本稿では「まとめ・要約機能」と呼ぶことにする。2つ目は「そもそも」「本当に」などと、それを受けて疑問を持って振り返りを行うものであり、「根源確認機能」と呼ぶことにする。そして3つ目は下に「何」「どう」「どこ」「だろう」「か」などの疑問・推量表現を伴い、その思い

を強めるという陳述副詞の働きを持つ用法であり、「強調機能」と呼ぶこととする。

もちろん、これは現代の「一体」という副詞についてのものであって、はじめからこの3つの機能(用法)があったわけではないようである。というのも、古い辞書において「一体」は次のように記述されているからである。

『和英語林集成』

(初版) One person, one being; (adv.) usually, commonly, =Zentai. — ni sh'te san-tai nari, one substance, but three persons.

(再版) One person, one individual, one being; (adv.) usually, commonly, =Zentai — ni shite san-tai nari, one substance but three persons. *Mokuzo* —, one wooden idol.

(三版) One person; one individual; one being; (adv.) usually; commonly; really; Properly speaking: — ni shite san-tai nari, one substance but three persons; *mokuzo* —, one wooden idol.

『言海』

(一)オシナベテ。一統。「世間一」一般 (二)モトヲイへバ。モトモト。ゼンタイ。「一事ノ起リハ」元来 慶應4年にアメリカ人宣教師 J. C. ヘボンが作成した『和英語林集成』の初版(1867)及び再版(1872)では, (adv.) usually, commonly, の訳を, 三版(1886)ではその2語に加え, really; Properly speaking: という訳を付け加えていることから「一般的に」「いわゆる」などの「まとめ・要約機能」を持った語だと考えられていたことがわかる。さらに明治37(1904)年に大槻文彦によって出版された『言海』では, (一)押しなべて。一統。一般。(二)もと言え。もともと。全体。といった「まとめ・要約機能」の語であると紹介されていることからわかるように、「一体」という副詞は名詞「一体」から派生したもので、「一つにして言えば」「総じて」という「まとめ・要約機能」としての語であったということが推測されるのである。そして「もともと」「そもそも」「本来は」といった「根源確認機能」へと分化し、次第に現代でよく用いる「強調機能」へと変化していったようである。

したがって時間の経過とともに、「まとめ・要約機能」→「根源確認機能」→「強調機能」と用法が細分化されていったと思われる。

改めて各社の国語辞典を見てみると、小学館の『日本国語大辞典』をはじめ、ほとんどの辞書が第一義として「まとめ・要約機能」や「根源確認機能」が記され、続いて「強調機能」の順で掲載している。ただ、三省堂の『大辞林』は、「強調機能」が一番初めに記載されており、いかにも現代語の用例を重視した辞典らしく感じられる。

3 梶井作品の中の使用例

- 梶井基次郎の作品から「一体」という使用例を抜き出し、彼がどのような用法で用いていたのかを調べ、梶井の傾向をつかむことを試みた。調査作品は『梶井基次郎全集 第一巻』所収の19作品である⁽³⁾。その結果、以下のような用例を得た。下線は引用者による。
- ① 寺町通は一体に賑かな通りで一と言つて感じは東京や大阪よりはずっと澄んでいるが一飾窓の光がおびただしく街路へ流れ出ている。9頁「檸檬」
 - ② 一体私はあの檸檬が好きだ。10頁「檸檬」
 - ③ では一体何だらうか。22頁「城のある町にて」
 - ④ 「一体何處の人にそんなことを言うたんやな？」今度は半分信子に訊いている。28頁「城のある町にて」
 - ⑤ 一体何をしているのだらう。38頁「城のある町にて」
 - ⑥ 倒された拍子に地面と睨めつこをしている時の顔附は、一体どんのだらう。39頁「城のある町にて」
 - ⑦ 一体、矢張症の、何人位の客をその女は持っているのだらうと、その時喬は思つた。117頁「ある心の風景」
 - ⑧ 「ほんとうに一体何をしてみたんです」130頁「Kの昇天」
 - ⑨ 一体どんな樹の花でも、所謂真つ盛りといふ状態に達すると、あたりの空気のなかへ一種神秘的な雰囲気を撒き散らすものだ。215頁「桜の樹の下には」
 - ⑩ 一体どこから浮かんで来た空想かさつぱり見当のつかない屍体が、いまはまるで桜の樹と一つになって、どんなに頭を振っても離れてゆかうとはしない。217頁「桜の樹の下には」
 - ⑪ 彼等は一体何處で夏頃の不逞さや憎々しいほどのすばしこさを失つて来るのだらう。179頁「冬の蠅」
 - ⑫ 一体脾弱な彼等は日光のなかで戯れているときでさへ、死んだ蠅が生き返つて来て遊んでゐるやうな感じがあつた。184頁「冬の蠅」
 - ⑬ 何時になつたら一体かうしたことに覺がつくのか。185頁「冬の蠅」
 - ⑭ 一体何處までゆかうとするのだらう。186頁「冬の蠅」
 - ⑮ 僕が一体どんな状態でそれに耽つてゐるか一度話してみましようか。198頁「ある崖上の感情」
 - ⑯ 一体そんなことがあるものですかね。199頁「ある崖上の感情」
 - ⑰ 「一体俺は今夜あの男をどうする積りだつたんだらう」204頁「ある崖上の感情」
 - ⑱ 一体そんなことがあり得ることだらうか。205頁「ある崖上の感情」
 - ⑲ 彼は平常歩いてゐた往来から教えられたはじめての路へ足を踏み入れたとき、一体こんなところが自分の家の近所にあつたのかと不思議な気がした。206頁「ある崖上の感情」
 - ⑳ 「一体、これ、どうしたの？」224頁「愛撫」
 - ㉑ 深い闇のなかで味はふこの安息は一体なにを意味してゐるのだらう。229頁「闇の絵巻」
 - ㉒ 一体ひどく心臓でも弱つて来たんだらうか、それともこんな病気にはあり勝ちな、不安ほどにはないなにかの現象なんだらうか 248頁「のんきな患者」
 - ㉓ 一体その「ヒルカニヤの虎」というものがどんなものであつたか吉田はいつも咳のすんだあとと妙な氣持がするのだつた。253頁「のんきな患者」
 - ㉔ 「あれは一体何やろ」255頁「のんきな患者」
 - ㉕ 一体そんなことを聞くやうな聞かないやうなことを言つて自分がそれを眺めることができると思つてゐるのか 255頁「のんきな患者」
 - ㉖ 吉田は母親がそれをおずおずでもない一種変な口調で言い出したとき、一体それが本気なのかどうなのか、何度も母親の顔を見返すほど妙な氣持になつた。262頁「のんきな患者」
 - ㉗ たいてい自分が嚙まないのはわかつてゐるのに、そのあとを一体どうする積りなんだと、吉田は母親のしたことが取り返しをつかないいやなことに思はれるのだつた 263頁「のんきな患者」
 - ㉘ 「一体どんな薬です？」 265頁「のんきな患者」
 - ㉙ 一体椎という樹は梅雨期に葉が赤くなるものなのでせうか。80頁「橡の花」
 - ㉚ 「一体誰がはじめにそんなものを欲しいと云ひ出したんだ」と人びとが思ふ時分には、尾羽打ち枯らしたいろいろな鳥が雀に混つて餌を漁りに来た。238頁「交尾」
 - ㉛ 一体何のための昂奮なんだらう。278頁「小さき良心」
 - ㉜ そのような彼等が、この寒い日に、一体何處で、何に遊び耽つているのかは彼女の大きな不審であつた。288頁「不幸」
 - ㉝ 眠りとは一体どうして起るんだらう。292頁「卑怯者」
 - ㉞ 一体なんだらう。292頁「卑怯者」
 - ㉟ 一体不可思議といふのは稀れといふことの異名だらうか。293頁「卑怯者」
 - ㊱ 俺は一体彼奴がお早うと云つた時にどうしたんだらう。302頁「卑怯者」
 - ㊲ 一体俺の顔が怖しかつたんだらうか 302頁「卑怯者」
 - ㊳ 俺はこれから一体どうしやう。314頁「彷徨」
 - ㊴ 一体どうして俺はこんなにやくざなんだらう。315頁「彷徨」未定稿
 - ㊵ 俺は一体、それぢや俺の生活が俺にぴつたり適應してゐるんだらうか。316頁「彷徨」未定稿
 - ㊶ 一体お前がそんなに、不愉快な思ひをして、獅噛みつ

- いている生活が一體それだけの労力を費す価値があるのかい 316 頁「彷徨」未定稿
- ⑫ 一體生き甲斐のある生活でどんな生活だ。316 頁「彷徨」未定稿
- ⑬ 一體善しと云ひ悪しと云ふのは何だ。316 頁「彷徨」未定稿
- ⑭ その嬉しいのは一體何故なんだらう。355 頁「瀬戸内海の夜」
- ⑮ 一體何がつれるんでせうね。357 頁「瀬戸内海の夜」
- ⑯ 一體どうしたといふんぢやらう 364 頁「帰宅前後」
- ⑰ 一體あの歯がゆい小悪魔奴はどんな奴なんだらう！ 381 頁「瀬山の話」
- ⑱ 私は一體何時彼が正真正銘の本気であるのか全く茫然としてしまふ。386 頁「瀬山の話」
- ⑲ 然し一體どんな人間がその正真正銘の本気を持つてゐるだらうか 387 頁「瀬山の話」
- ⑳ 寺町通は一體に賑かな通りで飾窓の光がおびたゞしく流れ出してゐる 391 頁「檸檬」
- ㉑ 一體角の家のことでもあつてその一方は二條の淋しい路だから素より暗いのだが 391 頁「檸檬」
- ㉒ 一體私たちが行為をする時は 396 頁「檸檬」
- ㉓ 一體何の因果だ！ 402 頁「檸檬」
- ㉔ 一體お前のやつたことがどれだけ悪いのだ。410 頁「檸檬」
- ㉕ 一體何是と云つたら片假名のイなんだらう。411 頁「檸檬」

以上の用例を「まとめ・要約機能」と「根源確認機能」と「強調機能」とに分類すると次のようになる。

「まとめ・要約機能」 ①⑫⑳㉕ 4 例 7%

「根源確認機能」 ②⑨⑯⑱⑳㉑㉒㉓㉔㉕ 12 例 22%

「強調機能」 ③④⑤⑥⑦⑧⑩⑪⑬⑭⑮⑰⑲㉖⑲㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿ 39 例 71%

このことから、梶井基次郎は「いったい」という語を、多くは疑問の意を強くする「強調機能」として使用しているが、それでも「まとめ・要約機能」や「根源確認機能」を3割使用しており、「いったい」という語を広く使用していることがわかる。

4 梶井と同時代の作家の使用例

では、そのような傾向は梶井個人の傾向なのだろうか、それともこの時代の傾向なのだろうか。もし、梶井が作家活動をしていた時代の傾向であるのなら、他の作家もまた同じような傾向になるのではないだろうか。それを調べるため梶井(1901生)と同じく明治中期に生まれた芥川龍之介(1892生)と横光利一(1898生)の作品の中から用例を抽出した。調査作品は芥川龍之介「芋粥」

(1916)、「地獄変」(1918)、「杜子春」(1920)、「藪の中」(1922)および横光利一「蠅」(1923)、「日輪」(1923)、「頭ならび腹」(1924)、「春は馬車に乗って」(1926)である。

- ① 一體旧記の著者などと云ふ者は、平凡な人間や話に、余り興味を持たなかつたらしい。「芋粥」
- ② では、その甚しい夢中になり方とは、一體どう云ふ事を申すのか、流石に御わかりにならない方もいらつしやいませう。「地獄変」
- ③ ふだんはかやうな品を、一體どこにしまつて置くのか、それは又誰にもわからなかつたさうでございます。「地獄変」
- ④ こら、その方は一體何物だ。「杜子春」
- ⑤ あそこは一體馬なぞには、はいれない所でございませう。「藪の中」
- ⑥ 夫を殺したわたしは、盗人の手ごめに遇つたわたしは、一體どうすれば好いのでしょうか？「藪の中」

以上の芥川の用例を「まとめ・要約機能」と「根源確認機能」と「強調機能」とに分類すると次のようになる。

「まとめ・要約機能」 なし

「根源確認機能」 ①⑤ 2 例 33%

「強調機能」 ②③④⑥ 4 例 67%

「春は馬車に乗って」の用例

- ① 俺が俺のために忍耐していると云うことは、一體誰故にこんなことをしていなければ、ならないんだ。横光の使用例は今回の調査作品では「強調機能」の1例だけであった。

5 梶井の前後の作家たちの使用例

では、梶井の前後の作家の使用実態を見てみよう。

まずは、明治初期に生まれた作家たちの使用実態として、夏目漱石(1867生)、島崎藤村(1872生)、谷崎潤一郎(1886生)を取り上げたい。調査作品は、夏目漱石「吾輩は猫である」(1905)、「三四郎」(1908)および島崎藤村「破戒」(1906)、「千曲川のスケッチ」(1912)ならびに谷崎潤一郎「痴人の愛」(1924)、「春琴抄」(1933)と初期の作品を中心とした。

「吾輩は猫である」の用例

- ① 双眸の奥から射るとき光を吾輩の矮小なる額の上にあつめて、御めえは一體何だと云つた。
- ② 吾輩は「そう云う君は一體誰だい」と聞かざるを得なかった。
- ③ 「一體車屋と教師とはどっちがえらいだろう」
- ④ ようやくの事で動揺があまり劇しくなくなったと思ったら、小さな声で一體何をかいたのだろうと云う。
- ⑤ 「一體あなたの所の御主人は何ですか」
- ⑥ そのトチメンボーという料理は一體あるんですか

- ⑦ 朗読会と云うと何か節奏でも付けて、詩歌文章の類を読むように聞えますが、一体どんな風にやるんです
- ⑧ 一体あの甘木さんが悪うございますよ、あんまり三毛を馬鹿にし過ぎませあね
- ⑨ 「一体だれが天然居士なんて名を付けてすましているんだい」
- ⑩ しかしその曾呂崎を天然居士に変化させたのは一体誰の所作だい
- ⑪ 細君は不満な様子で「一体、月並月並と皆さんが、よくおっしゃいますが、どんなのが月並なんです」と聞き直って月並の定義を質問する
- ⑫ 一体誰に御聞きになったんです
- ⑬ 一体博士になっておかんのが君の不了見さ、ねえ奥さん、そうでしょう
- ⑭ 「御存じでなくてもいいや、一体誰だい」
- ⑮ 一体少し学問をしているととかく慢心が萌すもので、その上貧乏をすると負け惜しみが出ますから
- ⑯ 一体どうした訳なんでしょう。（「吾輩は猫である」）
- ⑰ 一体あなたの月給はどのくらいなの。
- ⑱ 君の創作なら面白いものだろうが、一体何かね。
- ⑲ 飛ぶ間に溺りを仕るのは一体どう云う心理的状态の生理的器械に及ぼす影響だろう。
- ⑳ 一体この湯は何に利くんでしょう。
- ㉑ 一体医者薬は利くものでしょうか。
- ㉒ 一体君は人の言う事を何でもかでも正直に受けるからいけない。
- ㉓ 一体禅とか仏とか云って騒ぎ立てる連中ほどあやしいのはないぜ
- ㉔ 一体掃除の目的は運動のためか、遊戯のためか、掃除の役目を帯びぬ吾輩の関知するところでないから、知らん顔をしていれば差し支えないようなものの
- ㉕ 一体だれに教わって来たものか分らない。
- ㉖ 珍品過ぎるわ。一体叔父さんはどこを散歩したの
- ㉗ 一体かしまるべきものがおとなしく控えるのは別段気にするにも及ばんが、
- ㉘ 何だか要領を得んじやないか。一体誰が何をしたんだい」
- ㉙ 一体どこへ行くんだい
- 「三四郎」の用例
- ⑳ 一体戦争はなんのためにするものかわからない。
- ㉑ 「一体そりやなんですか。ぼくにゃ意味がわからない」
- ㉒ 「一体何を話していたのかな」
- ㉓ 三四郎が見ると、この絵はいったいにぱっとしている。
- ㉔ 一体こうやって、毎日々々描いているのに、描かれる人の眼の表示用が何時も変わらずにいるものでしょうか

以上の夏目の用例を「まとめ・要約機能」と「根源確認機能」と「強調機能」とに分類すると次のようになる。

「まとめ・要約機能」 ③⑪⑮⑳㉑㉒ 6例 18%

「根源確認機能」 ⑥⑧⑬⑲㉓㉔㉕ 8例 24%

「強調機能」 ①②④⑤⑦⑨⑩⑫⑭⑯⑱㉖㉗㉘㉙ 20例 58%

「破戒」の用例

- ① 一体瀬川君は何処が好いでせう。
- ② 一体今宵は何があるんだらう。
- ③ 一体何が原因で、あんなに深く沈んで行くのだらう。
- ④ 一体君は今何を考へて居るのかね。
- ⑤ 一体彼の先生は何処を出た人なんですか。
- ⑥ 一体年に肥料が何の位要るものか、其様なことは薩張解らん。
- ⑦ 一体瀬川君などは奈何いふことを考へて居るんでせう。
- ⑧ 一体瀬川君は妙に猜疑深く成つた。だから其様な下らないものが耳に聞えるんだ。
- ⑨ 一体父が家畜を愛する心は天性に近かつたので、随つて牧夫としての経験も深く、人にも頼まれ、牧場の持主にも信ぜられた位。
- ⑩ 一体普通の客に茶を出さないのは、穢多の家の作法としてある。
- ⑪ 一体彼の御客様は奈何いふ方だえ。
- ⑫ 一体丑松が師範校へ入学したのは、多くの他の学友と同じやうに、衣食の途を得る為で
- ⑬ 一体是は奈何したのであらう。
- ⑭ 一体肺病患者といふものは彼様いふものか知らん。
- ⑮ 一体私は左様他人のことを喋舌るのが嫌ひです
- ⑯ 一体君は誰から瀬川君のことを聞いて来たのかね。
- ⑰ 一体和尚さんの病氣といふのは、今更始つたことでも無いんです。
- ⑱ 一体世間で其様なことを言触らすといふのが既にもう吾儕職員を侮辱してるんだ。
- ㉑ 一体誰が言出したんだか知らないが、若し世間に其様な風評が立つやうなら、飽迄も僕は弁護して遣らなけりやならん。
- ㉒ 一体瀬川君は近頃非常に考へ込んで居られるやうだが、何が原因で彼様憂鬱に成つたんでせう。
- ㉓ 一体彼の先生は奈何いふ種類の人だらう。
- ㉔ 自分は一体何処へ行く積りなんだらう。
- ㉕ 一体自分は何の為に是世の中へ生れて来たんだらう。
- ㉖ 一体学務委員が気が利かないなんて、私共に喰つて懸るといふ仕末ですから。
- ㉗ 一体自分達の方から進んで生徒を許すのが至当だ。
- 「千曲川のスケッチ」の用例
- ㉘ 一体千曲川の沿岸では女がよく働く、随つて気象も強い。

- ②⑦ 一体、この小諸の町には、平地というものが無い。
 ②⑧ 一体諸君はよく菓子を好かれるが、一回に凡そどの位食べるんですか
 ②⑨ 一体、犀川に合するまでの千曲川は、殆ど船の影を見ない。
 ③⑩ 一体にこの辺では麵類を賞美する。
 ③⑪ 一体にこの山国では学者を尊重する気風がある。
 ③⑫ 一体に人の心が激しいからだと思ふ。
 ③⑬ 一体にこの辺では百坪を一升蒔と称え、一ツカを三百坪に算し、
 ③⑭ 一体先生がこの地方に退いて青年の教育を始めるまでには長い経歴を持って来た人で、
 ③⑮ 一体、わたしが初めてトルストイの著作に接したのは、その小説ではなく、

以上の島崎の用例を「まとめ・要約機能」と「根源確認機能」と「強調機能」とに分類すると次のようになる。

「まとめ・要約機能」 ⑥⑧⑨⑩⑬⑮⑯⑳㉑㉒㉓㉔㉕

14例 40%

「根源確認機能」 ⑤⑦⑫⑭⑮⑰⑱㉔㉕ 10例 29%

「強調機能」 ①②③④⑪⑬⑯⑲㉑㉒㉓ 11例 31%

「痴人の愛」の用例

- ① 一体十五六の少女の気持と云うものは、肉親の親か姉妹でもなければ、なかなか分りにくいものです。
 ② これに就いては少し委しく話さなければなりません、一体私は常識的な人間で、突飛なことは嫌いな方だし、出来もしなかったのですけれど、
 ③ 一体私をどう云う人間と思っているのか、どう云うつもりで附いて来るのか、それは分かりませんでした、
 ④ 「一体どんな物を読むのさ」
 ⑤ 一体ナオミは、音楽の方はよく知りませんが、英語の方は十五の歳からもう二年ばかり、ハリソン嬢の教を受けていたのですから、
 ⑥ 一体二年間も何を教え、何を習っていたのだから訳が分らない。
 ⑦ お前は一体幾つになるんだ。
 ⑧ ありゃ一体どうしたんだ。
 ⑨ 一体女は別として、男でダンスを習いに来ようとする者は、
 ⑩ 一体、今日に限ったことではありませんけれども、厳格に云うと私の眼にはナオミより外に女と云うものは一人もありません。
 ⑪ ハタで見ていて一番鼻ツ摘まみだったのは、一体君は誰だったと思う？
 ⑫ 一体寝る時はどうなるんだい？
 ⑬ 一体この部屋は二人で寝てさえ狭苦しい上に、ナオミの肌や着物にこびりついている甘い香と汗の匂とが、

- ⑭ ナオミは一体、その肌の色が日によって黄色く見えたり白く見えたりするのですが、
 ⑮ 「長谷の海岸にあると云うのは、一体誰の別荘なんですか？」
 ⑯ 「だけどこの風で歩いたら一体何に見えるだろう？」
 ⑰ 「君とナオミとは、一体いつからそう云う関係になっていました？」
 ⑱ 「ですが一体、ナオミが君と今日逢うと云う約束したのはいつなんですか？」
 ⑲ 「じゃ、一体どうしたらいいのよ？」
 ⑳ ああ、私は一体どう云う積りでこんな精密な写真を撮って置いたのでしょうか？
 ㉑ 家じゅうの者が一体あれは何者だと云う騒ぎになったもんだから、
 ㉒ 『このお嬢さんは一体何処の人ですか』
 ㉓ 「ヒドイ仇名がナオミに附いていると云うのは、一体どんな仇名ですか？」
 ㉔ あなたは一体、この夏鎌倉にいらした時分、ナオミさんに幾人男があつたと思います？
 ㉕ ……それから一体、何分ぐらい立っただしょうか？
 ㉖ ——これは一体夢でしょうか？
 ㉗ 一体この女は、どんな積りで己と友達になろうと云うのかと、私はその時考えました。
 ㉘ 一体女の「湯上り姿」と云うものは、
 ㉙ 一体彼女は、自分の顔は見ているだろうが、背中がこんなに美しいことを知っているだろうか？

「春琴抄」の用例

- ③⑩ いったい新参の少年の身をもって大切なお嬢様の手曳きを命ぜられたというのは変なようだが始めは佐助に限っていたのではなく女中が附いて行くこともあり
 ③⑪ いったい鶯は上手に飼えば寿命が長いものだけでもそれには細心の注意が肝要で経験のない者に任せたら直き死んでしまう
 ③⑫ 当時は婦人の身長が一体に低かったようであるが
- 以上の谷崎の用例を「まとめ・要約機能」と「根源確認機能」と「強調機能」とに分類すると次のようになる。
- 「まとめ・要約機能」 ⑤⑨⑩⑭⑳㉑ 6例 18%
- 「根源確認機能」 ①②⑬㉒㉓ 5例 16%
- 「強調機能」 ③④⑥⑦⑧⑪⑫⑮⑰⑱㉔㉕㉖㉗㉘ 21例 66%

続いて明治後期（明治30年～）に生まれた作家の使用例として、坂口安吾（1906生）と太宰治（1909生）を取り上げる。調査作品は坂口安吾「白痴」（1946）、「墮落論」（1946）および太宰治「斜陽」（1947）、「人間失格」（1948）である。

「白痴」の用例

- ① だがいったい女が伊沢の愛情を信じるのが起り得るような何事があったであろうか。
- ② いったい言葉が何物であろうか、何ほどの値打があるのだろうか、
- ③ この戦争はいったいどうなるのであろう。
「墮落論」には用例はなかったが、以上の坂口の用例を「まとめ・要約機能」と「根源確認機能」と「強調機能」とに分類すると次のようになる。

「まとめ・要約機能」 なし
 「根源確認機能」 なし
 「強調機能」 ①②③ 3例 100%

「斜陽」の用例

- ① まあ、ゆうべは、いったい、どうしたのよ？
- ② 健在なれ！ と願う愛情は、これはいったい何でしょう。
- ③ いったいあなたは、何をお考えになっているのでしょうか。
- ④ いったいまあ、私はそのあいだ、何をしていたのだろう。
- ⑤ これは、いったい、思想でしょうか。
- ⑥ いったい、僕たちに罪があるのでしょうか。
- ⑦ 革命は、いったい、どこで行われているのでしょうか。

「人間失格」の用例

- ⑧ 自分は、いったい幸福なのでしょうか。
- ⑨ だまされた事に気づいた時、その時の人間たちの怒り、復讐は、いったい、まあ、どんなのでしょうか。
- ⑩ いったいに、女は、男よりも快樂をよけいに頼張る事が出来るようです。
- ⑪ このアネサに限らず、いったい女は、どんな気持で生きているのかを考える事は、自分にとって、蚯蚓の思いをさぐるよりも、ややこしく
- ⑫ どうするつもりなんです、いったい、これから。
- ⑬ いや、あなたの気持は、いったいどうなんです。
- ⑭ いったい、どうも、ひとをひとり世話しているというのは、どれだけむずかしいものか、世話されているひとには、わかりますまい。
- ⑮ いったい、あなたは、これから、どうするつもりなのです。
- ⑯ いったい、どっちが貧乏なのよ。そうして、どっちが逃げるのよ。
- ⑰ シゲちゃんは、いったい、神様に何をおねだりしたいの？
- ⑱ 世間とは、いったい、何の事でしょう。
- ⑲ 自分はいったい俗にいう「わがままもの」なのか、またはその反対に、気が弱すぎるのか、自分でもわけがわからないけれども、

以上の太宰の用例を「まとめ・要約機能」と「根源確

認機能」と「強調機能」とに分類すると次のようになる。

「まとめ・要約機能」 ⑩⑲ 2例 10%
 「根源確認機能」 ⑥⑧ 2例 10%
 「強調機能」 ①②③④⑤⑦⑨⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲ 15例 79%

もちろん、今回の調査だけですべての傾向が導き出せるわけではない。調査した作品もそれぞれの作家のほんの一部にしか過ぎない。また、取り上げた作家も少なく、さらに彼らの生まれや育ちもさまざまである。作品の内容や文体によって「いったい」という語が使いやすいものもあれば、使いにくいものもあることは予想できる。

しかし、無作為に抽出しただけでもこのようにある程度の傾向がつかめるように思う。

5 副詞「いったい」という語の用法の変化について

副詞の「いったい」には、「まとめ・要約機能」「根源確認機能」「強調機能」があり、どの機能がよく使われるかということは、年月とともに変化が見られるように思われる。

先ほど確認した8人の作家を生年で大雑把にまとめ、作品に使用された「いったい」の機能別の数値をまとめると、以下の表のようになる。

生年		まとめ・要約機能	根源確認機能	強調機能
明治前期	夏目漱石	18%	24%	58%
	島崎藤村	40%	29%	31%
	谷崎潤一郎	18%	16%	66%
明治中期	芥川龍之介	0	33%	67%
	横光利一	0	0	100%
	梶井基次郎	7%	22%	71%
明治後期	坂口安吾	0	0	100%
	太宰治	10%	10%	79%

このようにしてみると、「いったい」という語の「まとめ・要約機能」は、明治前期生まれの作家たちにはある程度用いられたが、その後はあまり使われなくなっていったこと、「根源確認機能」は、明治前期生まれの作家や明治中期生まれの作家に用いられたが、それらだんだん世代が下がるにつれて用いられなくなること、「強調機能」はどの世代にも用いられているが、「まとめ・要約機能」「根源確認機能」が用いられなくなっていく分だけ使用頻度が上昇することが見て取れる。

「いったい」という語が本来名詞であり、そこから「一つの」「全体的に」の意味として用いられたものというのは、現代でも「いったいぜんたい」という強い疑問を表す語として残っていることから推測される。

今回は明治生まれの作家たちを中心に比較検討を行

ったが、大正生まれ、昭和生まれの作家たちとの比較を行えば、より「強調機能」へとシフトしていく様子がかがえるものと考えている。

それについては、今後の考察にゆだねることとする。

今回さまざまな作家の用例採集に際し、利根成美、宮崎愛万、中村歎菜、圓山実穂、山崎花菜、山田泉希さんの協力を得た。記してお礼を申し上げる。

注

- (1) 新藤一男「Syntax of *Ittai*」『山形大学紀要』第11巻第2号 1987 pp.265-279
- (2) 稲田奈緒美「副詞「一体」の歴史的変遷」『国文研究』熊本県立大学 2007 pp40-50
- (3) 調査した19作品は以下の通りである。「檸檬」「城のある町にて」「ある心の風景」「Kの昇天」「桜の樹の下には」「冬の蠅」「ある崖上の感情」「愛撫」「闇の絵巻」「のんきな患者」「椽の花」「交尾」「不幸」「卑怯者」「彷徨」「瀬戸内海の夜」「帰宅前後」「瀬山の話」「瀬山の話（檸檬）」
上記はいずれも『梶井基次郎全集』筑摩書房 1966所収の作品である。

引用作品

- 『梶井基次郎全集 第一巻』筑摩書房 1966
「芋粥」集英社 1972
「地獄変」新潮社 1968
「杜子春」旺文社 1965
「藪の中」新潮社 1968
「春は馬車に乗って」新潮社 1969
「吾輩は猫である」新潮社 1961
「三四郎」新潮社 1948
「破戒」新潮社 1954
「千曲川のスケッチ」新潮社 1955
「痴人の愛」新潮社 1947
「春琴抄」新潮社 1951
「白痴」新潮社 1948
「斜陽」新潮社 1950
「人間失格」新潮社 1952